

「美しい日本語を大切にしたい」

しゅっぱん

こうろうしや

出版文化の功労者

かどかわ

げんよし

角川 源義



人生を変えた一冊の本

「しまった、乗り過ごしてしまった」
角川源義さんが本からふと目を上げると、降りるはずの駅はとくに過ぎていました。

神通中学（現在の富山中部高校）を卒業した後、東京で浪人生活を送っていた源義さんは、神田の古本屋で買ってきたばかりの本に、夢中になっていたのです。

それは、折口信夫の『古代研究』という本でした。その本は、読めば読むほど難しい本だったので、それ以来、受験用の参考書が、手につかない状態が続きました。

この本をしつかりと読みたい。そう考えた源義さんは、折口先生が教授をしている国学院大学を受験しようと決意しました。そして、見事に合格したのです。



戦争に負けて

国を立て直さなければならぬ今こそ

日本の文化を大切にしなければ！

そうだ、出版社をおこして

文学をもり立てよう。

角川源義さんは、戦後いち早く「美しい日本、なつかしい日本」を大切にしようと、出版社をおこしました。

源義さんは、すぐれた俳句をたくさんよんだ俳人でもあるんだって。

国文学の学者としても、活躍されました。



大学時代、源義さんはあこがれの折口先生だけでなく、言語学者として名高い金田一京助先生や、民俗学で知られる柳田國男先生からも、さまざまなお話を教わりました。

2 文化の花を咲かせよう

| 角川源義の三二年表 | | |
|-----------|-----|-------------------------------|
| 西暦 | 年齢 | |
| 1917年 | | 中新川郡東水橋町(現在の富山市)に生まれる |
| 1924年 | 7歳 | 東水橋尋常小学校(現在の富山市立水橋中部小学校)に入学する |
| 1930年 | 13歳 | 県立神通中学校(現在の富山中部高校)に入学する |
| 1937年 | 20歳 | 国学院大学に入学し、折口信夫先生に師事する |
| 1938年 | 21歳 | 柳田國男先生のもとで、民俗学研究に没頭する |
| 1945年 | 28歳 | 角川書店をおこす |
| 1958年 | 41歳 | 俳誌「河」を創刊する |
| 1961年 | 44歳 | 論文「語り物文芸の発生」にて、文学博士号をとる |
| 1975年 | 58歳 | 亡くなる |



源義さんの一周忌で配られた記念の品。源義さんの最後の句集となった『西行の日』にちなんでつくられた。(八尾正治氏所蔵)

またこれらの先生方との出会いは、後の角川書店を開くのに、貴重な財産となったのです。

出版文化で日本を再建

戦争が終わった今、たくさん本を読みたいという若者たちが大勢いる。その人たちのために、何かできないだろうか。

大学を卒業した後、学校の先生をしていた源義さんは、日本の国を立て直すために、自分はどうなことをしたらよいかと考え込んでいました。

教師として、子どもたちを教える仕事も大切だし、しかし、私は出版を通して、美しい日本、なつかしい日本を大切にすることを、多くの人々に語りかけたい。

考えた末に、源義さんは出版社をおこすことを決心し、お父さんの源三郎さんに話しました。

すると、お父さんは、一本の天びん棒を源義さんに差し出しました。

「この棒は、魚の行商の仕事をしていたとき、魚の入ったおけを吊り下げながら売り歩くために使っていた棒だ。これをお前に譲ろう。」

源義さんのお父さんは、若いころからさまざまな仕事をして、苦勞を重ねた人でした。その苦勞を忘れないように、米問屋をおこして成功した後、天びん棒を離さなかったのです。

「私も、これを眺めてがんばります。」

源義さんは、お父さんの援助をもとに、小さな出版社をおこしました。戦争が終わってから、わずか3か月後のことでした。

角川文庫の創刊

源義さんは、銀行に資金援助を頼んだり、本屋さんに本を売ってくれるように頼んだりして、けんめいな努力を重ねました。

そして、恩師の先生方の本や、紙質が良くきれいな本として有名になった『堀辰雄作品集』など、いろいろの本を出版しました。

良い本を、もっと安い値段で届けたい。そう考えた源義さんは、文庫本の出版を始めました。すると、たくさん読者から、安い文庫本をもっと出版してほしいというはがきや手紙が、ぞくぞく届くようになりました。



源義さんの書いた本。源義さんは、学者としての論文や句集を出版するなど、さまざまな文学活動を行いました。(水橋郷土史料館所蔵)



山田 孝雄



角川源義さんのように、言葉の研究をした先輩に、山田孝雄さんがいます。

孝雄さんは、家の都合で、富山県尋常中学校（現在の富山高校）を中退しましたが、自分ひとりで勉強し、先生の資格を取りました。

ある日、孝雄さんが、中学で国語の文法を教えていたときです。

「先生、『は』という助詞は、主格以外でも、使うことがあると思うのですが…」

生徒に質問された孝雄さんは、返事につまりました。教科書に書いてあることを、そのまま教えていたからです。

孝雄さんは、この問題について、いろんな本や論文を探して読みましたが、納得できる説明は、とつとつ見つかりませんでした。

「よし、私がこの問題に取り組みよう」
これをきっかけに、孝雄さんは、日本語を徹底的に研究しました。一生を通じて、孝雄さんが書いた論文は300余り、出版した本の数は70冊にもなりました。

この努力が認められて、孝雄さんは、文化勲章を受章しました。

読者の願いに心を打たれた源義さんは、小型の文庫本をさらに出版する決意をしました。

当時、小型の文庫本を発行することは、大出版社でなければできない仕事とされていました。一冊あたりの利益が少ないうえに、一度に大量の在庫を抱え込むことになるので、資金を準備したり管理したりするのが難しいのです。

たくさんの読者のために、なんとしても文庫本を出版するぞ！

難しい仕事でしたが、源義さんは積極的に挑戦しました。

果たして、角川書店の発行した小型の文庫本が本屋さんに並ぶと、本は飛ぶように売れたのです。他の出版社も「角川文庫」に続けとばかり、小型文庫本をどんどん出版するようになりました。

その後、源義さんが『昭和文学全集』を出版すると、今度もまた、作っても作っても印刷が間に合わないくらい、爆発的に売れました。

『昭和文学全集』が成功した後、『日本絵巻物全集』『図説世界文化史体系』『世界美術全集』『図説俳句大歳時記』『日本近代文学大系』『日本地名大辞典』など、源義さんは、すばらしい本をたくさん手がけていったのです。

俳人として 学者として

源義さんは、さまざまな書物を出版する一方で、少年のころから興味をもっていた俳句にも力を注ぎました。

源義さんは、神通中学（現在の富山中部高校）に



1981年、水橋郷土史料館前庭に建てられた源義さんの句碑（俳句の石碑）には、次のような文字が刻んであります。「父祖の地や 蜻蛉は赤き身をたるる」源義さんにとって、蜻蛉は、ふるさとそのものでした。童謡「赤とんぼ」も、大好きな歌でした。



富山市立針原小学校の運動会では、源義さんの天びん棒のエピソードにちなんで「それゆけ！ 天びん棒」という競技を行いました。



源義さんと言葉：源義さんは、高野山の参道の奥の院にある芭蕉（ばしょう）の句碑「父母のしきりに恋し 雉子の声」に心打たれ、自分の随筆集の題名を「雉子の聲」としました。

源義さんのおもかげ

「小学校卒業のとき、父から『夢ありて楽し』と書かれた色紙を贈られました。私の心の中には、今でもこの言葉が生きています。そして、私の記憶にある父は、机に向かい、本を読んでいる後ろ姿の父です。本に熱中したら本だけ。その一点集中型には、いつも感嘆していました」
と、源義さんの長女である辺見じゅんさん（作家・歌人）は、源義さんのことを話しています。



源義さんの生まれた水橋では、江戸時代から俳句がさかんだったんだよ。

源義さんは、1961年には、母校の富山市立水橋中部小学校の校歌を作詞したんだって。



子どものころから好きだったことを、ずっと続けた情熱がすばらしいと思います。

通っていたころ、俳句と出会いました。源義さんの生まれ育った水橋は、もともと俳句がさかんだったこともあり、源義さんは、校友会誌に「俳人一茶の生涯」を執筆したり、俳誌に投稿したりするなど、俳句に夢中になりました。若いころは俳句で身をたてようと考えたこともあったほどです。そんな源義さんは、1958（昭和33）年に、俳誌「河」を創刊して、俳句の世界に活気をもたらしました。そして、今までに作った俳句を本にまとめたり、いろいろな俳人と交際したりして、俳句の研究を続けました。源義さんは、出版社をおこして日本の文化をもう立てるという目標と、子どものころから抱いていた夢の両方を達成したのです。源義さんの俳句に対する情熱はだんだん高まっていき、俳句文学館を建設したいという夢をもつようになりました。その夢は、源義さんが亡くなったあとも、志を同じくする人々によって受け継がれ、や

がて実現されました。また、源義さんは、学者として学問を究めようとする気持ちも抱いていました。仕事を終えた深夜、一人静かに文学研究を続けていたのです。1961（昭和36）年、源義さんは、論文「語り物文芸の発生」を発表して、文学博士になりました。3年後には、国文学者として母校の国学院大学で教えることになりました。また、ほかの大学でも若い学生に文学の大切さやおもしろさを伝えていきました。このように源義さんは、一生を通じて、日本語や文学に深く関わりました。出版人、俳人、そして学者という三つの立場から、美しい響きをもつ日本語やそこから生まれる文学に、心からの愛情を注ぎ続けたのでした。



富山市立針原小学校5年生のお友達が、源義さんの親せきで、富山県郷土史会会長の八尾正治さんから、源義さんのお話を聞きました。

57ページからは、誰もやったことのない、新しい仕事に挑戦した先輩たちを紹介します。最初は、お金を社会に活かすことに注目した安田善次郎さんのお話です。